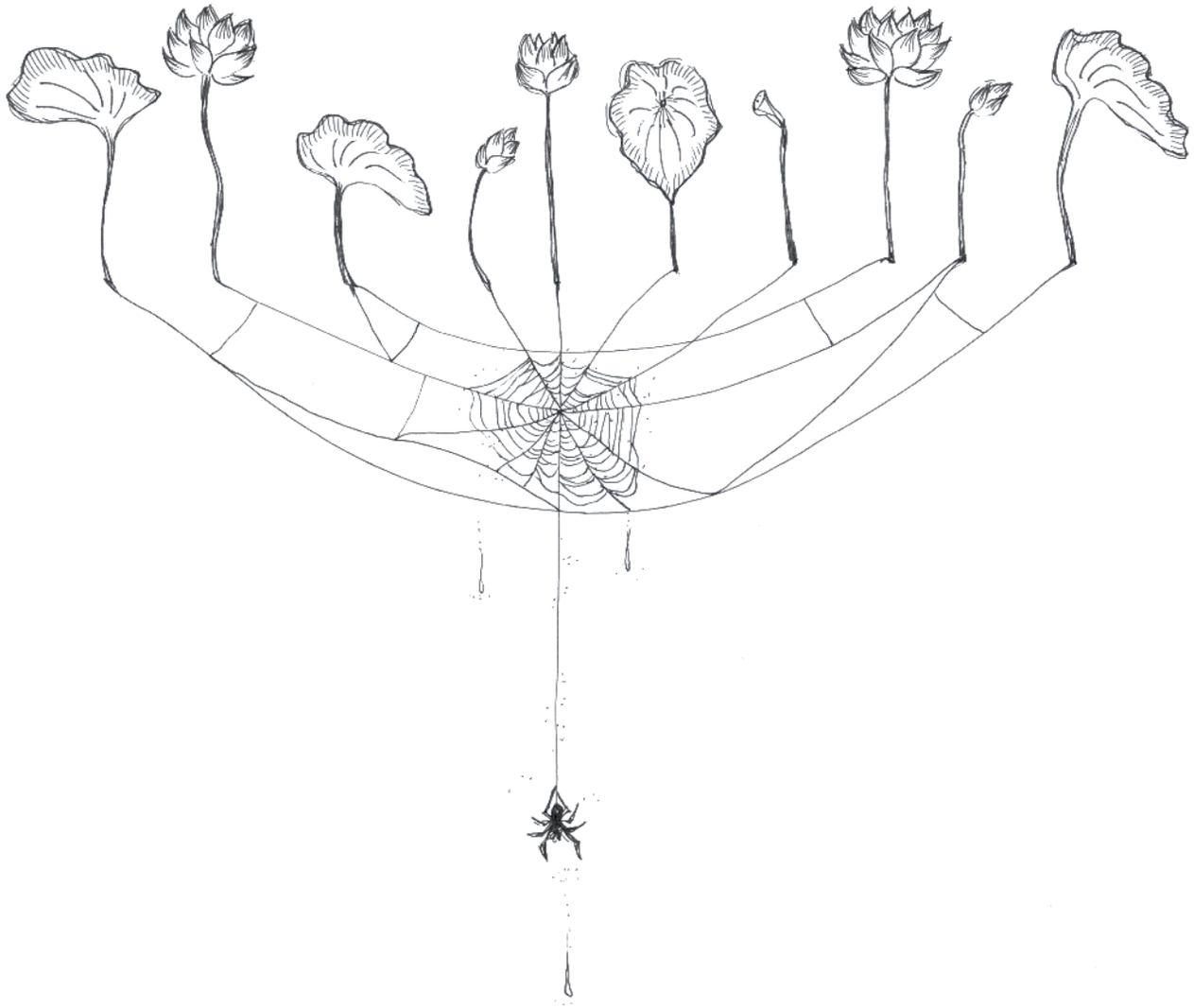
蜘蛛の糸

芥川龍之介



一

◆極楽。御釈迦様が地獄にいる犍陀多に目を留める。
◆ナレーター・犍陀多

ある日の事でございます。御釈迦様は　極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになって いらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なく あたりへ溢れて居ります。極楽は丁度 朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様は　その池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

すると その地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時　この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、

犍陀多　「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」

と、こう急に思い返して、とうとう その蜘蛛を殺さずに　助けてやったからでございます。

御釈迦様は　地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうして それだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸を　そっと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遥か下にある地獄の底へ、まっすぐに　それを御下しなさいました。

二

◆地獄。犍陀多が蜘蛛の糸に気づき、上りはじめる。
◆ナレーター・犍陀多

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまに そのくら暗から ぼんやり浮き上っているものがあると思いますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云ったらございません。その上 あたりは墓の中のように しんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ罪人がつく 微な嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もう さまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力 さえなくなっているのでございましょう。ですから さすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、その ひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄から

ぬけ出せるのに　相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

こう思いましたから　犍陀多は、早速　その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に　上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし　地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦って見た所で、容易に上へは出られません。やや　しばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなく　なってしまいました。そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それから　あの　ぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、

犍陀多　「しめた。しめた。」

と笑いました。ところが　ふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちが、自分の　のぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一　途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければ　なりません。そんな事があったら、大変でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせと　のぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこで犍陀多は大きな声を出して、

犍陀多　「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」

と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断れました。

ですから犍陀多もたまりません。あっと云う間もなく風を切って、独楽のように　くるくる　まわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに　落ちてしまいました。

後にはただ　極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

◆極楽。歩きだす御釈迦様。
◆ナレーター

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしゃいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ　石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、また　ぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄から　ぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。

（大正七年四月十六日）

語彙

御釈迦様：釈迦如来＝ブッダのことです。約 2600 年前に誕生。地上の人間の中でただ 1 人、修行を成し遂げ、仏様となり、仏教を開きました。

極楽：極楽浄土のことです。死後、良いことをした人が行ける素晴らしい場所とされています。悪、穢れ、悲しみなどのつらいことがなく、楽だけがあります。

蓮：池や沼の中に生える植物です。葉が円く、夏になると水上につき出した茎から白や紅の花を咲かせます。浄土宗では極楽浄土に往生した人が、蓮の花に生まれると言われます。

蕊：花の中心にある、おしべとめしべのことです。

地獄：悪いことをした人が死後落とされる恐ろしい場所です。仏教における本来の「地獄」とは厳密には異なります。焦熱地獄、極寒地獄、賽の河原、阿鼻地獄など、生きている間に犯した罪に応じて様々な責め苦が課せられます。

▼地獄

三途の川：死んだ人が、死後７日目に渡るといわれる、あの世とこの世の間にある川です。

覗き眼鏡：箱の一方に凸レンズを取り付け、他方に絵をはめ込み、拡大して見せる装置です。「覗き機関」「箱眼鏡」とも言います。

犍陀多：サンスクリット語の人名に漢字を当てたものです。

玉のような：主に真珠など宝石に見立て、張りがあり滑らかで輝いているもの、美しく愛おしいもの、単純に美しく麗しいものを喩える時に使用します。ここでは、池の水を水晶に、蓮の葉を翡翠に喩えるなど、極楽の壮麗な美しさが強調されています。

嘆息：ため息をつくことです。

蛙：カエルのことです。

何万里：「里」は距離の単位で、３～４km ほどです。途方もなく遠いことを表しています。

存外：「予想していた以上に」「思いのほか」「案外」という意味です。

莫迦：無知で愚かな様子を指します。僧侶たちの隠語だったと考えられています。対して、「馬鹿」という表記は『太平記』に初めて登場し、意味としては「無礼者」に近い意味で使用されます。この物語が仏教のお話であること、口をぽかんと開けている様子からも、「莫迦」という字の方がしっくり来ると言えます。

浅間しい：いやしくて嘆かわしいこと、あきれてしまうことです。

頓着：「とんちゃく」とも読みます。深く気にしたり、心配したりすることです。

萼：花のガクのことです。おしべとめしべ、花弁など、花冠の外側にある部分です。

本来の仏教の世界観

極楽：一切のけがれ、苦しみ、悲しみがなく、楽しかありません。美しい蓮や宝石で溢れています。

地獄：インドの言葉で「捺落迦（ならか）」転じて「奈落」とも呼ばれます。地獄での苦しみは、人間が想像できるものではありません。針の山や血の池があり、何兆年も痛み苦しみ続けます。

これらのイメージは、人間に分かりやすいよう、お釈迦様が喩えたものです。本当はもっと概念的な世界です。

阿弥陀如来（あみだにょらい）
全ての仏の師

極楽浄土（ごくらくじょうど）
阿弥陀如来の浄土

大宇宙には
仏様がいっぱい
それぞれの浄土を建国しています
浄土には一切のけがれがありません

釈迦如来（しゃかにょらい）（ブッダ）

地球上で唯一　仏になった方
容姿 才能 地位 財力などを捨て
仏教を始めた開祖

無勝荘厳国（むしょうしょうごんこく）
釈迦如来の浄土

仏

菩薩

菩薩（ぼさつ）

高いさとりを開き　仏に近い存在
弥勒菩薩（みろく）・観音菩薩（かんのん）・普賢菩薩（ふげん）など
お地蔵（じぞう）さまも実は菩薩！

仏教の修行
52のさとり 全てを開く

輪廻を抜け出す
唯一の方法！

仏教をできるのは
人間界に生まれた時だけ
いつやるの？　今でしょ！

人間

帝釈天・阿修羅など
仏教の守り神の神様は
輪廻の中にいます。

輪廻転生（りんねてんせい）のサイクル

死後、生前の徳に合わせ、
次の世界に生まれ変わります。

天上界	人間界	修羅界（しゅら）	畜生界（ちくしょう）	餓鬼界（がき）	地獄界
楽しみが多いが悲しみも存在	私たちの現世 苦楽が存在	闘争が激しい	動物の世界 弱肉強食	飢え続ける 痩せ細る	表現できない 苦が存在

楽　六道（ろくどう）（6つの世界）　苦

上下の位置関係は
他の宗教の考え方の影響？

キリスト教	日本神話
天国	高天原（たかまがはら）
地上	豊葦原（とよあしはら）
地獄	黄泉（よみ）

似ているお話がいっぱい

- ケーラス「カルマ」の中の一編（1894年，ドイツ）：インド哲学を扱っており、日本でも翻訳されました。「蜘蛛の糸」は、芥川龍之介がこの話に着想を得て、日本に広まっている仏教のイメージを織り交ぜてアレンジしたというのが定説です。
- ラーゲルレーヴ「わが主とペトロ聖者」（1905年，スウェーデン）：キリストが地獄に天使を放ち、聖人ペテロの母親を救い出そうとします。
- イタリア・スペインの民話：天国にいるシエナのカタリナが、地獄にいる母親を引き上げようとします。
- 山形県・福島県・愛媛県の伝承「地獄の人参」：欲張りな老婆は、生前貧しい人に腐ったニンジンをあげたことがあるので、地獄からニンジンにつかまり極楽へ行こうとします。（もしかすると「蜘蛛の糸」の後にできたお話かも？）

いずれも、便乗しようとする他の亡者や魂を蹴落とそうとしたため、救われずに終わります。

朗読を楽しむポイント！

- 芥川龍之介が初めて書いた児童文学です。小さい子どもにもわかるよう、優しく丁寧に語りかけましょう。
- 極楽のシーンを読む時と、地獄のシーンを読む時で、雰囲気を変えてみましょう。声のトーンを意識すると良いでしょう。クライマックスにかけてどんどんたたみかけるように盛り上げます。
- 朗読では、おおげさに演技しすぎず、ある程度、聞き手にイメージを委ねるように読むことが多いです。
- 「カンダタ」など初めて出て来る固有名詞は特に注意して、ゆっくりはっきりと発音しましょう。

参考：Wikipedia，仏教Web入門講座（http://true-buddhism.com/）

Podcast ののラジオ

好評配信中！
視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com/wp/feed/podcast

劇団ののと読む　朗読テキスト「蜘蛛の糸」　Podcast 配信版

発行日　2018 年 4 月 1 日
著　者　芥川　龍之介
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです
底本　　芥川龍之介全集 2
出版社　筑摩書房（ちくま文庫）
初版　　1986 年 10 月 28 日
入力版　1996 年 7 月 15 日
図書カード URL
http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card92.html